

るなるえあ　く天羽狐の創作室く
三々梨弥生

「魔王が侵略戦争をやめるための、
ありとあらゆる方法。」

魔王は侵略戦争を行っていた。

魔王の軍勢を率いるのは、四天王と呼ばれる四人の将軍だった。

魔王が支配する地は侵略戦争によって広がり、魔王国と呼ばれた。

魔王に抵抗する国はことごとく魔王軍に滅ぼされ、占領された。

魔王を恐れぬ者は次第に減ってゆき、最後の一国が残るのみとなった。

魔王と正面切って戦おうというこの国には切り札があった。

魔王も彼の者にだけは討たれるだろう、と噂される人物であった。

魔王へ挑まんとするその者に、人々は世界の命運を託した。

勇者だ——が、しかし、この物語の主人公は彼ではない。

魔王である。

* * *

【提案その一】

降伏する。

A. 論外です。

* * *

やたらと広い城の奥、やたらと豪華うごうしやな玉座に気だるげ

に腰掛けて、若い男がおもむろに言葉をついた。

「魔王って何だろうな……」

問いかけても独白ともつかない台詞が余韻を伴って
虚空に消える。

ややあつて、

「それを仰いますと御身の存在意義が著しく揺らぎま
す。陛下」

涼しげな女の声が横手から返ってきた。

陛下、とそう呼ばれた男はうんざりと自身の恰好を見
下ろす——。黒を基調とした衣は一見シンプルではある
がいつ舞踏会に呼ばれても問題ないくらいに質・デザイ
ン共に計算されつくした上等なものだ。肩から斜め掛け
したマントにいたっては縁に金糸の刺繍があしらわれ
た上に宝石（主にアメジスト系）が散らされているとい
う贅沢と悪趣味の間を綱渡りするような品である。

「そう。俺は魔王だ」

恐怖の代名詞。

魔王国の頂点。

四天王を従える最強かつ最凶の存在。

動かしがたい事実を確認するように、男——魔王は自
身の存在を肯定した。

しかし続ける。

「だが、何故俺は魔王なんだ？」

「今日はぜひぶんとお悩みなのですね」

隣——分厚いカーテンに隠された書類棚の前で羊皮
紙の束を整理していた女が振り返った。薄蒼い燐光を放
つ銀色の髪と紅玉色の双眸は、他の臣下達や魔王とお揃
いだ。

女が身につけた服はおおよそ戦闘向きには作られて
いない。書類棚や羊皮紙がとてもよく似合うデザイン
である。女は四天王とはまた別の存在、魔王の秘書官を
務めていた（もつとも、秘書官とは名ばかりで時には立
場を越えた辛辣しんらつな意見も遠慮なく飛んでくるのだが）。
秘書官は眉ひとつ動かさずに言う。

「その玉座に座る方が、世間一般に『魔王』と称されま
す。ですから貴方は魔王陛下なのでしょう」

「なら、お前が座ればお前が魔王になるのだな」

「物理的に、ではなく資格の問題ですわ。わたくしが座
らせて頂いたところで、それは『座に就いた』という意
味にはなりませんもの」

そして、

「魔王陛下が哲学に興味がおありとは。存じませんでし

た」

「ちよつとな」

魔王は渋面で応じた。

「哲学でも何でもいいから、答えてみてくれ」

「では僭越ながら。……哲学的な見地から申しますと、

『魔王』とは一種の記号のようなものでしょうか」

「記号？」

「はい。いわば世界における共通認識です。『魔王』という単語に含まれる意味は呼称だけに留まりません。そこには貴方の存在、世界に占める影響力、立ち位置など

——貴方を貴方たらしめる、あらゆる情報を瞬時に想起させるだけの語義があるのです」

「……もう少しシンプルに頼む」

「貴方は世界を脅かす存在である……と、どこかの誰かに伝わり易いということですわ」

「どこかの誰かって、どこの誰だ？」

「あくまでもものの喩えですから。そこはご想像にお任せします」

冗談とも本気ともつかない調子で淡々と言葉を並べる秘書官。

魔王は理解できるところだけ理解しておくことにし

た。

「そうか。俺は、単なる記号か……」

聞いたばかりの言葉を反芻しながら呟く。

「ならば、個人の意思などあつてないものなのだな」

それきり黙っていると、規則正しく靴の踵を鳴らして秘書官が歩み寄ってきた。艶やかな唇が開かれる。

「……ランチのおかずに嫌いなものでもありましたか？」

「そうではない！」

「では、何なのです？」

「……」

面と向かって問われ、魔王は一瞬押し黙る。

おずおずと訊ねた。

「怒らないか？」

「内容を聞いてみなければ、何とも」

「……そこは『怒らない』と言っておけよ……」

「では、怒らないということにしておきます」

「建て前そのままか!？」

「嘘を申し上げるわけにはまいりませんので」

「……わかった。じゃあ、怒ってもいい」

しづしづといった体で頷く。

たつぷりと間を空けて……恐怖の代名詞であり魔王の頂点であり四天王達を臣下に持つ男は、重々しく口を開いた。

「俺は、な——」

魔王は告げる。

「侵略戦争をやめようと思う」

* * *

【提案その二】

「やめる」と言う。

A. 戦いに突き進んできた魔王国の歴史を鑑みれば、唐突かつ理不尽の上ない発言です。臣下の反感を招く恐れがあるかと。

* * *

秘書官は眉ひとつ動かさなかった。

代わりに口が動いた。

「怒っています」

……現在形で言った。

「とても、怒っています」

……より表現を強めて二回目を言った。

三回目はひとまず収められる。

怒っています、と言われて若干しよんぼりとしている魔王に向かって、冷淡な声が言葉を続ける。

「我が国の歴史を否定されるのですか。御自身が始められた侵略戦争ですよ」

「ああ。……遠い昔にな」

魔王は虚空を見つめる。長々とした回想に突入するつもりはないらしく、秘書官がさつさと話を先に進めた。

「始まりはどうあれ、ここまで続けてきたのです。趨勢うしろせは我が国が握り、完全勝利を目前に控えて臣下達も皆、勢いづいております。それを——」

「ああ。わかっているさ、説教されずとも」

「では、何故です？」

紅い双眸がスッと細められ、問いが重ねられた。

「侵略戦争に飽きられたのですか？」

「……いや」

「臣下の働きにご不満でも？」

「……いいや」

「では——」少し間を空け、淡々と「勇者に臆おくしたので
すか？」

天敵と噂される相手の名を出したこの問いに、

「あいつに臆するつもりはない」

魔王はキッパリと即答を返した。

「そうですか」

平坦な声のまま頷く秘書官。

魔王はしばらく問い掛けの続きを待っていたが、いつ
まで経っても秘書官がものを言わないので、こちらから
問い掛けてみることにした。

「……皆は、お前のように怒るだろうか？」

「当然です」

キッパリ、と先ほどの魔王を真似たような返事があっ
た。

台詞が並べ立てられる。

「たとえ口に出さず貴方の命令に従っても、一度芽生え
た不信任は蓄積され、いずれは何らかの形で表に現れる
でしょう。激流の大河を無策に押しとどめれば水は溢れ
暴れるもの。侵略戦争をやめるおつもりならば、四天王
や将兵——臣下達の反感を招かないように事を進める
のが国としては良策です」

秘書官は靴の踵を鳴らして、ぐるぐると歩き回り始め
た。

独り言のように、

「……魔王陛下の威光を保ったままで……かつ国際的
優位性の維持と……四天王への方は……」

ブツブツブツブツ……

魔王は秘書官の思考に割って入った。

「とりあえず、『戦争をやめる』と宣言するだけしてみ
てはどうだ？」

「実行に移す前にその先をお考え下さい、と上申させて
頂きますわ」

独り歩きがピタリと停まつての言葉。

「先ほど、臣下の反感を招かないように、と申し上げた
ばかりでしょう。国内を混乱に陥らせるおつもりです
か！」

叱られた。

こうなってはもう、どちらが上司かわからない。

「はい。すみません……」魔王は素直に提案を取り下げた。

「さあ、魔王陛下も一緒に考え下さい。戦争をやめるというのは大仕事なのですから」

「あ、ああ……」

玉座の上で腕を組む。

黙考を始めようとしたところで、魔王はふと気がついた。

「そういえば」

「何ですか？」

『『やめる』方向で、話を進めてくれるのだな』

宣言を聞いた時には怒ったのに、と首を傾げる。

秘書官はフイとあらぬ方を向いた。

「それが魔王陛下のお望みなのですから、仕方無いでしょう」

* * *

【提案その三】

テキトウな指示を出して無意味に進退を繰り返させ、戦況を膠着させて両軍が疲れた頃に休戦に持ち込む。

A. 時間が掛かり過ぎます。加えて、疲れた頃に勇者一行が魔王城に到達すれば目も当てられない状況となるでしょう。

* * *

【提案その四】

脅威となる第三の軍勢が襲来すれば両軍手を取り合せて……

A. 侵略者は魔王陛下ひとりで充分です。

* * *

「仕方無い、とはまた……容赦のない奴だな」

「装飾された賛同がお好みでしたら、いくらでも持ち上げて差し上げますわ」こちらを向く秘書官。

……珍しく微笑んでくれているが目が怖い。

魔王はさりげなく話を元に戻した。

「とにかく、他に方法を考えるか、宣言するにも工夫が必要というわけだな！」

「はい」

「わかった。考えてみよう」

改めて黙考する……。

… … …

【提案その五】

魔王軍を組織解体する。

A. 魔王国全土の弱体化に繋がります。現在対峙している国に攻め滅ぼされても良いのでしたら構いませんが……。

(駄目だな、この案は)

魔王は脳裏に浮んだ案を自ら却下した。秘書官にダメ出しされる声リアルに想像できそうだ。

(次だ、次)

【提案その六】

神様の言うとおり。

(「戦争をやめよ」と神が告げられた、と神託をでっち上げてみる)

A. 神殿を買収できたらぜひお試し下さい。

(臣下は丸め込めるかも知れんが、天罰が下りそうだな

……)

魔王は胸中で唸る。

(次だ、次。次、次……)

… … …

……。

口にすれば秘書官に即座に一刀両断されそうな、突拍子もない考えしか浮かんでこない。ついに集中力が切れてぼやいた。

「一度始めた侵略戦争をやめるだけなのに、難しいものだな」

『『だけ』と仰いまして、全軍をあげての一大事業だったのですから——』

言いかけたのを途中で止めた秘書官が、「あっ」と声を洩らして後ろを振り返った。

あらわになった白いうなじに向かって魔王は問い掛ける。

「どうした？」

「……少々お待ち下さいませ」

短く断りを入れるや否や、秘書官が踵を返す。彼女が向かったのは回廊へと続く扉の前だ。ぴたりと閉じられていた鋼鉄製の扉を薄く開くと、秘書官は足早に薄暗い回廊へと姿を消した。

扉が閉まって、

一時間後……。

——ギイと扉を押し開いて秘書官が帰ってきた。

「長い『少々』だったな」

独り大人しく玉座で待っていた魔王はむくれ顔で出迎えた。

規則正しい足音を響かせて、心持ちいつもよりも急いだ歩調の秘書官が玉座の下までやって来る。

そして到着するなり、

「大変です、陛下。我らが城で反乱です！」
クレーター

「なんだと！」

拗ねていたことも忘れて魔王は驚いた。

報告を促す。

「それで、どういう状況なんだ？」

「四天王以下の魔王軍が、魔王陛下下の指揮下から外れることを宣言。城内のほぼ全域が彼らによって制圧されました」

「突然だな。……どうしてそのようなことが」

「声明文が出ておりますわ」

「秘書官が、出て行く時には持っていなかった羊皮紙を一枚、両手で広げて魔王へと差し出した。そこには、

『侵略戦争をやめるなど、魔王陛下のご乱心に他ならぬ。かくなる上は我らの指示に従っていただく!』

と、要約するとそのような内容の文言が書き連ねられていた。

声明文の下には四天王全員の書名が並んでいる。インクはまだ生乾きた。

「どうやら、先刻の陛下の宣言を聞いていた者が居たよう……」

「さっきの今だぞ!」

魔王は展開の早さに驚いていた。

「たった一時間で反乱が起こったのか?」

「戦の鉄則は迅速、かつ的確に要所を押さえることにありますので。他国への度重なる襲撃で練度が高まっている魔王軍であれば、城ひとつの制圧など造作もないことでしょう」

「誉めている場合か!」

手元の反乱声明文に目を落とし、見覚えのある四天王達の書名がそこにあることをもう一度確認した。羊皮紙を床へと放り出し、夢ではないかと頬をつねる。大変痛い。

「四天王全員が反乱かあ……」

「独裁軍事政権が裏目に出ましたね」

魔王が放り出した声明文を拾い上げ、くるくると丁寧に丸めながら秘書官。

「頂点である魔王陛下だけが組織の中枢から切り離されたとあっては……反乱の意思の無い末端の兵達に事の真相を伝えようにも、情報を伝える手段がありません。どの伝達ルートも四天王を経由するように組みまれますから……。陛下のご命令は城から外に出ることなく彼らに握りつぶされてしまうでしょう」

「どうしてそんな命令系統になってるんだ」

「これまでは四天王が互いに牽制し合うことで内輪の監視となっていたのです。全員が示し合わせて陛下を裏切るなど想定外ですわ……」

二人揃って溜息をついた。

一足先に気を取り直した秘書官が、魔王へと問い掛ける。

「どうなさいます?」

「どう、とは?」

「魔王陛下の手勢は今やゼロ。もう城の中ですら安全とは言えない状況です。今のところ玉座の間まで制圧する気はないようですが……長引けばどうなるか。彼らにあって邪魔だと判断されれば、下手をするとコレです」

彼女は言いながら自らの首筋に手刀を当てることで、

場合によっては魔王の暗殺すら在り得ると身ぶりで見せてみせた。

* * *

【提案その七】

四天王を残らず斬り捨てて和平派にすげ替える。

A. 魔王らしい暴君っぷりですが、途中で返り討ちに遭う危険があります。

また、魔王陛下の臣下に和平派が見当たりませんので、この案を採用する際は新人の募集から行わなければなりません。

* * *

面と向かって暗殺を示唆された魔王は少しばかり動揺した。

玉座の上から秘書官をまじまじと見つめる。

「お前、よく無事だったな……」

「魔王陛下への伝言係を残しておきたかったとみえます。わたくしが戦力外であることは周知の事実でありますし」

両腕を軽く広げる非武装の彼女。その非力さは良く知っていた魔王であった。

「それもそうか」

「素直に納得されると悲しいものがありますね。……ところで、貴方は無闇に回廊へとお出になりませんか。戦闘技量をお持ちの分、警戒のあまり手加減無しに襲われる危険がありますので」

扉の方を振り返っての忠告。

魔王は顔をしかめた。

「自分の兵だった者に襲われるのか。世の中は分らないものだな……」

「完勝寸前の侵略戦争をおやめになるよりは、よほど道理に適っておりますわ」

「こんな時に嫌味を言わないでくれ、嫌味を」

はあ、と何度目かの溜息。今日はよく溜息をつく日だ。やりとりを経て落ち着きを取り戻し、魔王は秘書官へと訊ね掛けた。

「反乱の大きさはお前の目から見て、どの程度のものだと思う？」

「しばしお待ちを」

秘書官はカーテンの陰に置かれた書類棚から、現在の魔王軍の規模が記された帳面を取り出した。パラパラとページを繰りながら言う。

「軍の総数は二十万人ですが……、戦線と魔王国全土の守備を維持しながらの反乱ですから、魔王陛下の指揮下を離れたとはいっても全軍が城を包囲しているわけではないでしょう。実際に反乱に加担したのは……そうですね……きりよく一割で、二万といたるところでしょう。そのうち、城内に展開した戦力が四天王と各々の手勢で四百名ずつ……。四足す、四かける四百で、およそ千六百四人が反乱の主力であるものと思われます」

「多いんだか少ないんだか」

「この城の規模を思えば妥当な数ではないかと。大軍勢を詰め込んでも動きが取れないだけですし、かといって少数ですと恐ろしいでしょう」

「恐ろしいって、何がだ？」

「魔王陛下が」

秘書官が肩をすくめて言い、魔王は目をしばたかせた。

やや時間をおいて言われたところを理解する。

「じゃあ反乱など起こさなければいいのに」憤然と感想を述べる。

「彼らには、彼らなりの意地があるのです」

にべもなく言いつつ秘書官が帳面を繰る手を止める。開いたページが見やすいように反転され、魔王の方へと差し出された。

「四天王の方々は侵略戦争を始める前からの貴方の臣下。魔王陛下のご方針が変わった時に備えて、反乱の準備を前々から進めていたのかも知れませぬ」

紙面には四天王それぞれの経歴や性格、趣味思考などの個人情報記録されていた。

「そうだ……。あ奴等は侵略戦争の推進派であったな」

魔王は遠い昔を思い出しかける。無用の回想へと突入する前に秘書官が素早く話を先に進めた。

「反乱という強硬手段に出るほどです。侵略戦争をおやめになりたい陛下の御意思は、彼らにとっては受け入れがたい事なのでしょう」

「まあ、これまで先陣をきつて働いてきたのは奴らなのだしな。戦争での勝利が何よりの喜びであろう」

「その点はわかり易くて良いですね。そして、貴方はその侵略戦争の大事な旗印——。条件次第では彼らを説得

することも可能かも知れません」

「……つまり？」

続きを促す。

秘書官は大きく頷いた。

「貴方の安全を考える上で、現状、優良の選択と思われるものは二つあります」

「魔王陛下が侵略戦争の続行を宣言される。あるいは限りなく続行に近い妥協案を彼らに示されることですわ」

* * *

【提案その八】

勝利条件を改める。

（侵略完遂ではなく、勇者一行の女戦士を手中に収めれば魔王国の完全勝利、など……どうだろうか!?)

A. 勝てば良いというものでもありません。

あと、嘘に出すならせめて王女あたりのクラスにして下ろす。

* * *

【提案その九】

歴史に残るような華々しい戦闘で勝利を収めた後、頃合を見計らって停戦に持ち込む。

（これなら戦勝気分も、戦後の国際関係の優位性も同時に確保できるだろうか?)

A. 比較的まともな案ですが魔王国においては邪道です。我が国の四天王がその程度の勝利で納得しますかどうか。

* * *

玉座の間は日頃から、大抵の場合そこに居る二人の内どちらかが口を開かない限りは静寂だけが広がる空間だ。

その静けさを破って、
「侵略戦争はやめる。妥協もしない」

魔王は断言した。

帳面を返すと、秘書官はそれを小脇に抱えた。彼女は眉ひとつ動かさずに問い掛ける。

『『やめる』を撤回なさらないのはともかく……、妥協もされないのですね？』

「ああ。ここでキツチリとやめておかないと、我が四天王のことだ。妥協したところでどうせ、後々、なんだかんだと理由をつけてずるずると引き延ばされるだけだろう？」

「確かにその可能性は否めませんが……」

そこで一旦言葉が切られ、

「意外ですわね。そこまで深くお考えになるとは」少しばかり目が丸みを帯びる。

「お前の思考を真似てみただけだ」

ついでに平坦とした口調も真似て言う。

それから、溜めた息を短く吐いた。玉座に座したまま遠く天井を振り仰ぐ。

「侵略戦争を始めてからここまでの事を思い返すと、俺の役目は侵略戦争を起こす事に有ったように思うよ」

しみじみと呟いた言葉は余韻を伴って虚空に消える。

それは秘書官に向かつて言ったのか、自分への独白だったのか……それとも、どこかの誰かに向けた台詞であったのか。

秘書官は黙って魔王の言葉に耳を傾けている。

魔王は話を前へと進めた。

「状況を整理しよう。俺の手勢はなし。四天王は反旗を翻し、魔王軍を俺に代わって意のままに動かしている。反乱者どもの目的は侵略戦争を継続すること。——大筋はこれで合っているな？」

「……いえ、貴方が未だ侵略戦争の中止をお諦めにならない事と、その為に反乱者達への説得材料を自ら捨ててしまわれた事も、付け加えておくべきかと存じます」

「可愛げのない部下だ」

「他ならぬ魔王陛下の秘書官ですので。貴方のお好みは心得ております」

平然と言つてのけられる。

たわいも無いやり取りを挟みつつ、現状の苦境具合の確認を終えた。……そろそろ、どう動くのかを決めるべき時だった。

魔王は一息ついた。

「どこかに控えの戦力でも用意しておけば良かったな。」

そうすれば此度の反乱も、侵略戦争をやめること自体も、存外簡単に解決していたかも知れない

そんなことを口にする。

今更言ってもどうしようも無い事ではあるが……もしかししたらあり得たかも知れない解決策に、つかの間、思考を向けてみた。

… … …

【提案その十】

勇者に協力を仰いで、和平に手を貸してもらおう。

A. 魔王陛下のプライドが許すのであれば。

… … …

「……何を半笑いしておいでなのですか？」

秘書官が気味の悪いものを見る表情をした。

「いや。……さすがにそれはないな、と思ってたな」

「どのようなお考えを？」

「もう忘れた。万策尽きたかな」

すっぱりと頭の中から思考を斬り捨てて、そう答える。

瞬間、秘書官の顔にちらりと物寂しそうな色が過ぎった。

それが元の無表情に戻ってしまうのも何となくつまらないと思ったので、

「ああ、もう一つ案があったぞ」

たった今思いついたかのように言葉を繋げる。それは実は、今回の一件が始まるよりもっと前——侵略戦争をやめようと思いついた時に、心に自然と浮んだ最初の考えでもあった。

少し、からかってやろう。

「魔王なんて、やめてやるのさ」

… … …

【提案その〇】

魔王をやめる。

A. 「貴方」が戦争をやめることはできませんが、魔王国は戦争を継続するでしょう。

… … …

「だ……」

口を半開きにしたまま静止する、ということを書書官はおそらく人生で初めて経験したに違いない。少なくとも、魔王が目にしてきた中では、なかなか新鮮な反応だった。

「だ？」

聞き返した魔王がニヤニヤしているので、冗談なのだとわかったようだ。

秘書官は冷淡に言い直した。

「だとすれば本末転倒も良いところですね。侵略戦争の顛末を見届けることさえ放棄されるのですしたら、魔王

陛下とは本当に『侵略戦争を起こした者』としてのみ歴史に刻まれるのでしょうか。大変残念な事です」

「ああ。それは本当に不本意だ」

心の底から残念そうに、魔王は笑みをこぼす。秘書官の面白い顔が見られたので、まあまあ満足だった。

「さて」

と言つて、玉座から立ち上がる。

莊嚴な意匠を凝らされた闇色のマントが動きに合わせて翻った。

「記号は記号なりに、記号たらんと徹するか。……千六百四、対、一では、いささか結果はわからんが」

遮るもののない路を扉に向かって歩む。

そのわずかな合間に、

「待っているか？」

「いいえ。貴方が城で『魔王』をなさっている時くらいは、お側におります」

三步斜め後ろに秘書官が付き従った。

「あ……」

最後に一つ思い至って振り返る。

「結局、言わないままだったな」

「何をです？」

「侵略戦争をやめる理由を、さ。何なら今から話しても

良いが——」

「結構ですわ」

呆れたような微笑みが返って来た。

「必要な事は、もう、確認済みですから」

魔王と側近。

気楽な時間は、ここまで。

数々の会話と思案を経た上で得た結論を、宣言する。

「我は魔王である！ これより反乱をねじ伏せ、和平策に否が応でも同意させる。異論はないな！」

「——全ては御心のままに。我が陛下」

* * *

勇者は数人の仲間と共に旅路にあった。

自らに課せられた役目を全うするために世界中を巡る彼は、仲間を相手にふと言葉を交わす。

「面白いや……。旅先でちよくちよく会うあの若い兄さん、最近見ないな」

「仕事が忙しくなりそうだ、とか言ってたぜ。……なあ、会えなくて残念だよなあ？」

「なんでこっちに話を振るんですか!?!」

「あらあら。照れちやつて可愛いんだから、このコは！」
目的を思えばこそ緊張感も増す旅路の中で、ひとときの和やかな空気を楽しむ。

彼らは知らなかった。

彼らだけでなく、どこの誰もが知らなかったかも知れない。

今この時、一人の男が悩み、喜怒哀楽し、自分の在り方を定めた事を——。

「完」

《奥付》

作品名・

「魔王が侵略戦争をやめるための、ありとあらゆる方法。」

作者名・三々梨弥生

初回公開年月日・二〇一六年一月二三日

公開ホームページ・「るなるえあゝ天羽狐の創作室」

URL <http://luna-le-air.vivian.jp/index.html>